

第2回 「高次脳機能障害の見方」

Hi、みなさんお元気でしょうか。前回は、高次脳機能障害者には多くの要因が絡み、それが対応を難しくしているという話をさせていただきました。今回は実際の患者さんの見方と対応の考え方について説明をして参ります。

英国では、Formulation（直訳は公式化の意味）という、患者さんの状態を表す図が用いられています（図）。これを見ると、様々な因子が関係し、かつ各因子がお互いに関連をしていることがわかります。患者さんは百人百様、多様性が高くなることがおわかりいただけますでしょうか。リハを考えると、これらの要素全てに対応しかつそれぞれを上手に連動させることが求められるわけであり、また、これだけ多様性が高いと全員に効果の出る共通のリハ方法を作ることが難しいことにもなります。この事情が背景となって、欧米では「神経心理学的リハ」という、認知の問題だけでなく、身体面や感情面、また家族や病前の性格等も対応に含む包括的全人的なリハが考案され、発展してきました。若干理屈っぽい話になりましたが、これは言い換えると「患者さんが目の前にいると想像して、最善が何かを考えて、複数のリハの方法を出し入れしていく」やり方と同じ意味であるとも考えられます。この患者さんを中心にみる視点への変換が、高次脳機能障害のリハを実施する際の肝になると私たちは思っています。

(I hope it makes sense.) (青木 重陽)

